

提 題

トマス哲学と聖書

水田 英実

1 トマス・アクィナスによる聖書講義

トマス・アクィナスの著作の中には聖書に関する多数の注解が含まれている。しかしそれはことさら驚くに値することではない。何故ならトマスは1256年にパリ大学神学部の教授に就任し、1259年に一旦退職した後、引き続きイタリア各地で教え、1269年から1272年にかけて二回目のパリ大学教授時代を経て、1274年に死去するまで、都合17年間、教授職に就いていたからである。当時の神学教授の主要な職務は、聖書の注解を内容とする講義を行い、討論を主宰し、説教をすることであった。そのためにトマスの聖書講義の記録として、『イザヤ書』『エレミヤ書』『詩編』『ヨブ記』『マタイ伝』『ヨハネ伝』『パウロ書簡』等々に関する多数の注解が残されることになったのである。

当時の聖書講義の手順は、聖書のテキストの中から一部分を切り出して、テキストを持っていない受講生のために音読したあと、テキストをいくつかの部分に分けて文脈を知る手掛かりを与えてから、一語一語読みすすみ、聖書の他の箇所との整合性を調べ、教父たちのさまざまな解釈を照合し、矛盾があれば、賛否両論に分かれて議論をして、合理的な解決を見出すというものであった。このようにして行われた聖書講義の記録のうち、*reportatio* あるいは *lectura* と呼ばれるのは学生の講義ノートであり、著者自身が手を加えたり、書き取らせたりしたものは、*ordinatio* あるいは *expositio* の名で今日に伝わっている。

ちなみに神学教授 (*magister in sacra theologia*) という呼称が一般化したのは十三世紀であって、それ以前の呼称はまさに、聖書教授 (*magister in sacra pagina*) であった。このことは、聖書講義が従来から神学教授の本務であったことを示すとともに、聖書教授という名前に代わって新たに神学教授という名前が用いられるにいたったのは、この時期に教授法に関する何らかの変化があったということを示唆している (この点は後で述べる)。

これらのほかに直接的に聖書に関わるトマスの著作として『黄金の鎖』と呼ばれる、

四福音書についての教父たちの注解の集成がある。また一説には、1256年の教授就任以前に既に、トマスは聖書講師 (cursor biblicus) として1252年から2年間、パリ大学で聖書を通読する授業を行ったとされる。この授業は、字句の簡単な説明を行うのみで詳細な議論に立ち入ることなく、テキストに即して聖書を読み進むものであったとされる。ただしアルベルトゥス・マグヌスに推挙されてパリ大学にきたトマスが、聖書講師になったことを示す記録がみつからないところから、聖書講師を務めた後で命題集講師 (baccalaureus sententiaris) になるのが当時の慣例であったにしても、トマスの場合は、先にケルンのアルベルトゥスのもとで聖書講師の資格を得ていたこともあり、パリ大学では最初から命題集講師として就任したと主張する人もいる。

2 聖書と聖書以外の文書

聖書講師をつとめたかどうかの詮議はさておくとして、十三世紀のパリ大学の神学教授であったトマスの職務が、聖書を読むことに本来的にかかわるものであったことには異論がない。それでは、そもそもトマスにとって聖書とは何であったのか。この問題に対して、いろいろな観点から答えることができることは言うまでもない。そこでトマス哲学と聖書の間にはどのような関係を見出しうるかという本題に入る前に、聖書と聖書以外の書物の区別について、トマスの所説を確認しておこう。

類似の問題として、いわゆる正典の確立という2世紀以来の歴史的な課題がある。この点に関して、『聖書の勧めとその区分』においてトマスは、「聖書は戒めることと援けることという二つの仕方て人々を永遠の生命に導く」けれども、旧約が「種々の掟を与えて戒めるという仕方て導く」のに対して、新約は「単に戒めだけでなく、恩寵の賜物を与えて援けるという仕方て導く」という仕方て、旧約聖書と新約聖書を区分し、さらにそれぞれを三つに区分した上で、各書を配置し、結果として正典目録を提示するにいたる。この正典目録の内容は、現行のカトリック教会のものと一致している。

正典性の根拠は、「カトリック教会は、著者〔の権威〕に疑問があるけれどもその教えに疑問がないいくつかの書物を聖書〔の正典〕に数えている¹⁾」ところに求められている。つまり正典性の根拠は「教会の受け入れにある」(ex Ecclesiae receptione) のであって、「著者の権威にはない」(non ex auctoritate auctorum) とされているのである。初代教会の頃から人々の救済に関する様々な文書が存在する状況の

中で作成された教会公認文書の目録を、「カノン」と称して「正典」を意味するにいたったことに照らして、正典に関するトマスの説明にことさら異を唱える理由はない。

しかし正典を確定する作業は、聖書を聖書以外の書物から区別する作業とは別である。教会の公認の有無を問わなければ、現にさまざまな「聖書」が存在しているからである。それでは聖書をそれ以外の文書から区別する原理についてトマスはどのように述べているのであろうか。『パウロ書簡注解』の中の『テモテ後書』に関する部分で、三章十六節の注解²⁾の中に、いくつかの興味深いことが述べられている。

まず、『テモテ後書』において「聖書は神の靈感による」と言われるのは、「他の文書が人間理性を通して伝えられるのに対して、聖書は神のものである³⁾」ことを意味しているという。しかし同じ箇所でもトマスは次のように述べて、「神の靈感」を区別の原理として立てて聖書と聖書以外の文書をわけることに対する疑問を取り上げている。「アンブロジウスが言うように、真であるものはすべて、誰によって語られるかを問わず、聖霊によるものであるとした場合、他のすべての書物が神の靈感によるものでないのはどのようにしてか、とあなたは言うかもしれない⁴⁾。」

この疑問に対してトマスは、神の業を二つに分けて答えている。一方はたとえば奇跡のように、神自身のなすこととして直接行われるのに対して、他方は自然のなすこととしていわば二次的原因を介して間接的に (mediantibus causis inferioribus) 行われる、自然の作用の所産であるという。この区別に対応して、神は人間のうちなる知性に対して二様の仕方でも知識を与えるとされる。聖書を通して直接的に教えるとともに、間接的に他の書物を通して教えるというのである。これによれば、聖書の啓示によって知られることも自然についての様々な書物を通して知りうることも、いずれも究極的には神の靈感に由来していることになる。これは、人間の理解の及ばないことについても及ぶことについても、神の啓示によって知ることができるという『神学大全』第一部の冒頭の設問において明らかにされた「聖なる教え」の必要性を根拠づけるための論点でもある。

この論点は、『テモテ後書』のこの箇所と言う「有用性」を論拠とする主張が、『神学大全』第一部の最初の設問において、反対異論として扱われているところからも明らかにすることができる。『テモテ後書注解』においてトマスは、聖書の有用性とは一般的な意味で有益な知識を得ることができるという意味ではなく、救済のために有益であるという限定された意味であるとしている。その上で『神学大全』第一部の最

初の設問の、「聖なる教え」としての神学と「聖書」が同義語として用いられていなければ成り立たない議論の中で、反対異論は「聖なる教え」の必要性の根拠として聖書が有用であることをあげるにとどまっている⁵⁾。それに対して、主文解答では、人間理性によって見出される哲学的諸学問以外に神の啓示にもとづく教えが必要であるとする理由として、人間の救済のために人間理性を越えたことを知るということだけではなく、人間の救済を確実なものにするために、神的なことについて、人間理性の及びうる範囲にあることについても啓示によって教えを受ける必要があったと言っているのである。

3 聖書としての「聖なる教え」

トマスは『神学大全』の主題が端的に神であることを明言している⁶⁾。これはトマス以前の神学を集約したロンバルドゥスの『命題集』が、アウグスティヌスの『キリスト教の教え』を典拠として最初に「ものとしるし」の議論を取り上げていることに対する批判でもある⁷⁾。ロンバルドゥスの『命題集』は4巻からなっている。そのうちの最初の3巻が「もの」について論じる部分であって、三位一体論、創造論、キリスト論、徳論を含んでいる。第4巻が「しるし」を論じる部分であって、秘蹟論を内容としている。この『命題集』が著されたことによって、聖書講義の教授法に変化が生じた。聖書の各書を順に読み進む聖書講義とは別に、各書のテキストや順序にしばられない仕方で、いわば組織神学の授業が行われるようになったからである。その意味で、ロンバルドゥスの『命題集』の成立によって、聖書教授から神学教授への呼称の変化が起ったのである。

しかしトマスは最初にこの『命題集』を注解する仕事にかかわったときから、ロンバルドゥスとは異なる構想をもっていた。批判の論点は、すべてを神の観点から扱うところに神学の成立根拠があること、またこの観点に立てば、神を主題とする神学において、神自身のことだけでなく、神を原因として存在する他の一切のことがらを扱うことに何ら支障はないというところにあった。「ものとしるし」の議論が神学から排除されることもまたなかったのである。いずれにせよ神学の主題に関するトマス説は、ロンバルドゥスのそれとは明らかに異なる。

トマスの『神学大全』は三部からなっており、第一部は神および神からの万物の発出、第二部は理性的被造物としての人間の神への還帰の運動、第三部は神へと向かう

際の道としてのキリストを論じるという構想を持ったものであった。しかも、このような構想を持った『神学大全』において展開される神学としての「聖なる教え (sacra doctrina)」は、それ自身として聖なる教えであるところの「聖書 (Sacra scriptura)」と同一であると考えられていた。それは、第三部のキリスト論がいわばすべてであって、第一部と第二部 (発出と還帰) はいわばその部分として位置づけられているからである。アリストテレス哲学もまたこの意味での「聖書」の中に取り込まれる。それは、哲学が人間理性による探求の試みであるかぎり、啓示の光を必要とすることがらであると考えられるからである。このように言うことができるならば、「アリストテレス哲学」は、まさに神学の主題に関するトマス説の中に存在していたのである。

4 他者を知る神

『原因論注解』のある箇所 (第十三命題) でトマスは、知性の自己認識の仕方に関して「アリストテレスの考えはカトリックの教えに合致している⁸⁾」と述べている。そのように述べる理由は、アリストテレスのいわゆる「思惟の思惟」に関するトマスの解釈と軌を一にしている。それはこの『注解』の同じ箇所でも「アリストテレスも『形而上学』第十二巻において〔第一の知性が〕自己自身しか認識しないというのは、他者についての認識を欠いているという意味ではなく、この知性の思惟内容は、他者の可知的形象によってではなく自己自身によって形成されるという意味であると述べている⁹⁾」からである。

同様にして『形而上学』の上記の箇所 (第十二巻) の『注解』においてもトマスは、「他者の認識が神的知性に完成をもたらすことがない以上、神は他者について無知でなければならない¹⁰⁾」という主張を斥けている。それは「思惟の思惟」としての第一原因による自己認識は完全であるから、そのうちにすべての結果の認識をも含んでいると言わなければならないという理由による。

要するにトマスによれば、第一の根源としての「神は自己自身を認識することによって万物を認識する」のである。これがアリストテレス説の解釈として妥当性を持つかどうかの吟味はさしあたり棚上げしなければならないけれども、少なくとも神的知性による事物の認識を神的知性の自己認識に還元をさせる道をつけることによって、聖なる教えの中で、いわばアリストテレス哲学を借りて、他者を知る神について、ト

マ哲学が自説を顕在化させているのである。神による神以外の諸事物に関する知を、神の自己認識の中に根拠づける認識論は、『神学大全』第一部において、神の知（第十四問）や事物の創造（第四十四問）の問題を論じる箇所で、繰り返し取り上げられている。そこからさらにトマスに特有のイデア論¹¹⁾にもとづいて『命題集注解』や『神学大全』や『形而上学注解』のみならず、『ヨハネ伝注解』においても、「アリストテレスはイデアが神的知性の中にある」としたという見解を表明するにいたっている。しかしこれはアリストテレス自身の説というよりは、トマス説の中に見出されるアリストテレス説と言わなければならないであろう。

5 トマス哲学と聖書

ところで、聖書の字句の意味の多重性という問題について、トマスは『神学大全』をはじめとしていくつかの著作で論じている。その場合にも、伝統的な分類に触れながら、事物を造る神は神自身を知ることによって神以外のものをも知るという、神学の主題に関するトマス説の特徴を保持した仕方では説明を試みている。聖書の作者としての神は、言葉を用いて事物を表示する（字義的意味 *sensus litteralis* をもたせる）だけでなく、その事物を別の事物に関係づける（霊的意味 *sensus spiritualis* をもたせる）こともできるというふうで説明しているのである¹²⁾。そこで聖書記者の念頭になかった意味（字義的意味）を読みとることが許されるのは、作者としての神が知らないはずのない意味を持たせる場合であって、この文脈を離れて、勝手な読み込みをすることが許されるというわけではない¹³⁾。比喩的表現の場合は、もともと聖書記者の念頭にあった意味を読みとることになるから、新たな意味を読みとるわけではない。また「かたどり」として読むのは、字句の持つ霊的意味を読みとるのであるから、やはり違う。しかしおそく哲学の伝統に疎い人たちの手になる「聖書」の字句から、哲学にかかわることを読みとることができるのは、上述の文脈の中で、作者としての神が知らないはずのない、別の意味を聖書の字句に持たせることによる¹⁴⁾。

「聖なる教え」には次の区別が設けられている。まず神自身について神自身にしか知られないことがらには、聖書の啓示によってのみ他者に伝えられる。これに対して、造られたものを通して知られることがらには、人間理性によって探求可能なことがらとして、哲学者たちによって誤謬を残しながら辛うじて認識されるにいたったのである¹⁵⁾。ところで聖書の啓示を通して最高度の仕方では神を知るにいたることは、神に知

られていることがらを含めて神を知ることでもある。したがってそこに神の側から世界を知る道があることになる。しかもわれわれがそのような仕方でも世界を知るにいたることが、神自身の計らいであったならば、そのような仕方でも神を知り、世界を知るにいたることが、あらかじめ神によって知られていると言わなければならないことになる。理性のみによって知りうる事物の世界においても、事物認識を神認識に還元する高度な道が開かれている。しかし人間理性による事物認識は、あくまでも人間理性の営みとして、上位の神認識に還元されない事物認識でもある。このようにして二段階の神認識を区別することによってトマスは、神を知ることには神が知ることでありという関係をアリストテレスと異なる仕方でも理解しているのである。

以上のことからトマス哲学を形成する原理として聖書が一定の役割を担っていると言うことが許されるのではないであろうか。それはたとえば、アリストテレスから「事物のイデアを神の中に措定した」という説を引き出す一方、「世界が神と等しく永遠であるとした」ことをアリストテレス哲学の誤謬として斥けることによって¹⁶⁾、アリストテレスが到達しえなかった別種の神認識の所在を認める余地を持った、トマス独自の哲学を顕在化させているからである。

なお、今回の私の提題に対して、聖書解釈と組織神学の関係、聖なる教えと聖書の同一性等々について、いくつものご質問をいただいた。いずれも簡単に答えられることがらでないことは言うまでもない。それらに答えるつもりで、いくつかの注を加えたけれども、いまだに考え続けていることもある。特に、トマスが聖書を解釈する「場」について、全存在の賦与という創造論が提唱されていることを考慮にいれるとき、どのように言うことができるかということである。

注

- 1) Thomas Aq., *De commendatione et partitione Sacrae Scripturae*. なお、トマスの教授就任講演（マンドネによれば聖書講師就任講演）とされるこのテキストが公刊されたのは1912年である。
- 2) *Id.*, *Super secundam epistolam ad Timotheum lectura*, 3, 3; cf. 注（5）
- 3) *Ibid.*: aliae sunt traditae per rationem humanam, sacra autem scriptura est divina.
- 4) *Ibid.*: Sed dices: quomodo non alia omnis scriptura divinitus inspiratur, cum secundum Ambrosium, omne verum, a quocumque dicatur, a Spiritu sancto est?

- 5) Thomas Aq., *Summa theol.* I, 1, 1 : Sed contra est quod dicitur II ad Tim. 3, (16) : omnis scriptura divinitus inspirata utilis est ad docendum, ad arguendum, ad corripiendum, ad erudiendum ad iustitiam. Scriptura autem divinitus inspirata non pertinet ad philosophicas disciplinas, quae sunt secundum rationem humanam inventae. Utile igitur est, praeter philosophicas disciplinas, esse aliam scientiam divinitus inspiratam.
- 6) *Id.*, I, 1, 7.
- 7) Cf. Petrus Lombardus, *Sententiae in IV libros distinctae*, 1, 1, 1 ; ロンバルドゥスの『命題集』がアウグスティヌスの『キリスト教の教え』*De doctrina Christiana*の構想を継承しているとは言えないこと、まして「組織神学」の拠り所をアウグスティヌスに求めるのは不当であるということについて、別に論じる必要がある。
- 8) Thomas Aq., *In De causis*, 13.
- 9) Cf. Aristoteles, *Metaphysica* 12, 9, 1074 b 34.
- 10) Thomas Aq., *In Met.*, 12, 11.
- 11) Cf. 拙著『トマス・アキナスの知性論』（創文社、1998）p. 229f.
- 12) Thomas Aq., *Summa theol.* I, 1, 10.
- 13) *Id.*, *De pot.* 4, 1 : Unde si etiam aliqua vera ab expositoribus sacrae Scripturae litterae aptentur, quae auctor non intelligit, non est dubium quin Spiritus sanctus intellexerit, qui est principalis auctor divinae Scripturae. Unde omnis veritas quae, salva litterae circumstantia, potest divinae Scripturae aptari, est eius sensus.
- 14) 霊的意味を読みとる場合には、聖書の他の箇所では字義の意味によって言及されていることが根拠になる（*Summa theol.*, I, 1, 10 ad 1）と言われる。議論を引き出しうるのは字義の意味のみだから（*id.*, I, 1, 10 c.）である。しかし新たな字義の意味を読みとる場合には、矛盾した解釈に対処するために聖書の他の箇所をあげることがあるほかに、理性的な判断にもとづいて知られる真理を聖書の字句の中に見出すことを許容するところまで解釈の幅が拡大されていると言える。じっさいトマスは『創世記』冒頭の数節を解釈するにあたって（cf. *id.*, I, 65 以下）、そこにいう「地」や「水」は「質料」を意味するとみなし、第一質料の被造性を明瞭に肯定した上で、質料に関するトマス説を提示しているのである。
- 15) *Id.*, *Summa theol.* I, 1, 1 et 6.
- 16) *Id.*, *Super Ioan.* 1, 1: Aristoteles vero posuit in Deo rationes omnium rerum, et quod idem est in Deo intellectus et intelligens et intellectum ; tamen posuit mundum coaeternum sibi fuisse. Et contra hoc est quod Evangelista dicit Hoc, scilicet Verbum solum, erat in principio apud Deum ; ita quod ly hoc non excludit aliam personam, sed aliam naturam coaeternam.